

紹介

日本及び支那の部

◎圖 書

國史に關するもの

征西將軍宮 文學士藤田明著 實文館發行

著者が史料編纂掛にありて南北朝時代の史料編纂を擔任せる傍ら、熊本縣教育會の委囑を受けて、前後五箇年銳意攻究の結果漸くにして上梓せる七百五十餘頁の大冊なり、本文は緒言以下二十章に分れ、征西將軍宮懷良親王の御降誕及其當時の勢形に筆を起し、鎮西御下向、薩摩著御前の九州、菊他御在城、直冬御征伐、筑、豊、肥御征伐、御武運の振興、明使の來府、太宰府陷落を叙して高良山の御敗戦に及び、更に後征西將軍宮長成親王の御活勁及御武運の衰微を述べ、弘和三年三月廿七日懷良親王薨御、官方の湖落、南北朝合一後の九州を説きて西征將軍宮と肥後國の章に筆を結ぶ。更に附録として、征西將軍宮御年譜、參考重要古文書集、略系圖の三項を添へて本文記事の參照に資したるは用意周到なりと謂ふべく、卷首及隨所に挿入せば寫眞及地圖と共に讀者を裨益するもの多大なり。斯著者の最近に物故せるは史界の一大損失なりと謂ふべし。(定價三圓)

帝都 文學博士喜田貞吉著 日本學術普及會發行

「歴史講座」の第一篇として發行せられしものにして三五段三百

餘頁あり。著者が多年苦心研究し又實地踏査せる歷代帝都の歴史地理學的研究にして、其の概要を一般讀書家に了解し易き様に記述編纂したるものなり。古代に於ける帝都沿革より飛鳥京、難波京、大津京、藤原京、平城京、恭仁京、長岡京、平安京、福原京を述べて東京奠都に及ぶ。卷頭には平城京條坊圖以下數葉の地圖を添へたり。(定價八十錢)

江戸時代史論 日本歴史地理學會編纂 仁友社發行

日本歴史地理學會が昨夏東京に於て開催せる講演會の筆記に各講演者の嚴密なる校正を加へて發刊せるものにして、前後三百年に近き江戸時代の、政治、經濟、法制、交通、風俗、文藝、宗教の各方面に亘りて斯界に著聞の講師が各得意の題を選びて論述したる六百五十頁の本文更に三十數葉の寫眞と四葉の地圖を添へ本文と對照して頗る光彩あり。(定價二圓四十錢)

南蠻記 文學博士新村出著 東亞堂發行

日本文明と西歐文明との接觸は南蠻文明輸入に始る。本書はこれに關する論文十九編より成る。「南風」の一章に極東流蜃の詩人カモエンスを憶ひて多情なる遊士をして一掬の涙を惜まざらしめ、「倭寇時代の俗謡」を誦しては壯快なる山歌の一篇に「殺伐なる海賊船が浙江の沿海に残した美しい遺影」を思はしめ、「足利時代に於ける日本と南國との關係」を論じては史料に乏しき暗黒の世界に一道の光明を與ふ、全篇みな紅毛の帆船の孕み來れる金風に滿ち、騷客飄吟の資材を與ふる事夥し、加ふるに著者の感傷的行文は、亦南國の色彩を移植し得て餘あり。(定價一圓五十錢)

一、國史八面觀 文學博士久米邦武著 磯部甲陽堂發行
 一、訂正大日本時代史 室町 渡邊世祐著 早稻田大學出版部發行

一、同 德川上 池田晃淵著 同
 一、同 古代下 久米邦武著 同

一、系圖繚覽 第二 圖書刊行會發行
 一、吾妻鏡 吉川本第三 同
 一、史料通覽 左經記 日本史籍保存會發行
 一、同 中有記一、二、三、 同

一、大日本史料 第十二編之十七 東京文科大學史料編纂掛發行
 一、幕末外國關係文書 附錄之一 同
 一、大日本地 新編鎌倉志鎌倉攬勝記 大日本地誌大系刊行會發行

一、同 近江輿地志略 下 同
 一、同 斐太後風土記 上 同
 一、國史西國大平記元利秀元記 國史研究會發行
 一、同 會津四家合考 同
 一、同 南部根元記 同

一、日本偉人 東照宮御實記附錄第一、第二、 同
 一、同 南龍言行錄 千年の松 同
 一、京都 京都坊目誌 確井小三郎著 京都叢書刊行會發行

一、德川幕府縣治要略 安藤博著 赤城書店發行
 一、日蘭三百年の親交 上村直次郎著 富山房發行
 一、大日本地方財政史 中島信虎著 實文館發行
 一、幕府瓦解史：熊田葦城著 有朋堂發行
 一、五山文學全集第四輯 上村觀光編 民友社發行
 一、佐藤信淵の農政學說 田中公直編 有斐閣發行
 一、朝鮮古蹟圖譜 朝鮮總督府 同警務總監部
 一、朝鮮衛生風習錄 同

西域考古圖譜

東洋史に關するもの

國華社發行

埋められたエチプト、バビロン、アッシリヤなどの遺跡を發掘して、遠い昔の文明に驚嘆の眼を張らしめた歐人の手は、遂に世界の屋根の東にも延びて、支那新疆の砂の中から漢唐時代の東西の遺文を數多く拾ひ上げた。英のスタインの「古代の和闐」、「カセイ沙漠の遺跡」、「獨のル、コックの「高昌」、佛のシヤヅンヌの「支那文書」などを初め、貴重な資料と研究とが相次で公けにせられたのは、これが結果を世に示したもので、永い間の暗府はこゝに初めて廿世紀の光明に照らされた次第である。歐人がかかる結果を贏ち得た間に、別に我が同胞の手によつても此事業は進捗して、回を重ねて探検に従事し、獲得された貴重な資料も頗ぶる多く、其研究も追々進んで居るを聞くにつけて、吾人は我が國の學界の權威の爲めに衷心慶賀の念を禁じ得ないことに、早く此資料と研究とを公やけにせらるゝ、日の來らん事を熱望して居つた。此の希望は遂に滿たされて先程「西域考古圖譜」なる名で國華社から

發行せられた、上下二卷に別れた大冊であつて、發掘品中重要なものを選擇して精緻を極めた木版玻璃版を以て複製したものである。此の選擇には京都文科大學の教官諸氏と東京文科大學の瀧教授とが、それ／＼専門の學科によつて當られたもので、上卷には繪畫、彫刻、染織刺繡、古錢、雜品、印度彫刻、下卷には佛典史料、經籍、西域語文書、印本を收め、毎紙題名が附してある。此の採掘事業を計畫され、また自らもこれに従事せられた大谷光瑞師の序文によると、此等の資料を研究し選擇の任に當られた諸氏が調査の詳細なるものに至りては別に之を公にするの目あるべしと雖、今茲には諸氏が調査の結果選定せるもの六百九十餘種を集めて之を複製して印行するに至つたとのことである。我等は此の資料とともに研究の發表を熟望して居つたので、これを他日に期せられたについては少からず遺憾の念を禁じ得ないのであるが、しかしかゝる研究は僅少の歲月で成就し得られるものでもあるまいし、また急げるが爲めに却つて誤りを生ずることも少くあるまいから蓋し當り此の圖譜丈の刊行で一部の望みを満足させねばならぬことであらう、我等の期待する此の「他日」は、かゝる貴重な資料を提供して、廣く世界の學者の研究に委ねられた寛容なる學者諸氏が、其名譽の上からしても必らず近い中に實現せしめらるゝことであらうと信じて疑はない、既に此の中の一部ものは研究の結果が發表せられ、圖譜中にも憐愍たる苦心の跡を歴々として窺ふに足るべき説明の附せられて居るものもあつて、我が學界の爲に心強さを感ずると共に、我等はこれに對して滿腔の謝意を表するものである。

今此の圖譜の中で最も注意すべきものと思ふものを摘記して見らる。

繪畫は五十四葉の中(32)の大曆六年の佛畫は年月を附せられた點に於て特に目立つて見ゆ、其の他唐代の繪畫と説明せられてある(24)(25)(43)の佛畫の斷片、(46)の水墨で樹木を書いたもの、(51)の樹下美人圖、(52)の婦女圖斷片等は繪として極めて注意すべきものと思ふ。壁畫は六朝時代から唐、唐宋間の三朝に區別されてあるが、六朝のもの(2)一葉丈でこれには主として顔面の描かれてある斷片八個を集め、唐代のものは十葉に及んで居るが(1)(8)(9)等の著しく西域の風を示して居る繪が際立つて見ゆる。唐宋間のものは銘丈を合せて十二葉其の畫面も立派な大きな斷片であつて、時代こそ前者に比して後れるが、畫としての面白味は寧ろ此等に於て認められる様に思ふ。

彫刻は十五葉、時代は唐のものばかりで、銅製陶製のものから石造、塑造、木造のものに及び、其の形も佛像、人像から鳥獸の諸像等多くの種類を含むで居るが、此の中では(9)(10)の人头塑像(11)(12)の塑造人像などを挙げねばなるまい。

染織刺繡は唐代のものばかり七葉でみな小さな斷片であるが、就中(4)の刺繡の斷片に天女が琵琶を彈いて居るのなどは我が奈良朝時代の繡佛に見えて居るものなど、思ひ合されて面白い。

古錢は八葉で支那の貨幣は五銖錢を初めとして唐宋時代のものに亘つて居るが(8)の中には「高昌吉利」なる方孔錢が一枚見えて居つて此の地で鑄造せられ通用せられたものであるのを知ることが出来るのは甚だ注意すべきものである。漢字以外の文字の銘ある

貨幣にはカロスチー文字かと思はるゝものもあり、梵字のものもあるが、多くはアラビア文字のもので比較的新時代のもの、多いことを示して居る。

・雑品の部は十葉で名の如く布製、土製木製石製或は銅製等の雜品が收められてあるが(1)の中の土製の香爐、(2)の中の石鏤、(3)の欄間用木材斷片、(4)の紋類等を擧げて置きたい。

印度彫刻の部は十一葉悉く石彫であつて釋尊像、同說法像、同降誕像を初め、皆印度彫刻の粹を集めたものである。

下卷佛典の部は晋より唐に亘る間の寫經六十八葉、別に附録として高昌國の寫經、經跋等八葉を收めてある、これなど一々の佛典の本文研究の結果は既に一部世に發表せられたものがあるが、其の他のものについては余輩の今知り得ざる所である、それについては後日の發表を待つとして、別にたゞ古寫經を愛玩する人、書道を論ずる人々に向つては先づ(1)に見えて居る西晋の元康六年寫諸佛要集經一葉を以てしても充分に古香に酔はしむることが出来る、また隸楷書體變遷の過渡期の有様を慨らして、大なる満足を買ふことが出来るであらう、なほ(2)(3)も晋代の寫經、(4)(5)は西涼建初七年の寫經(6)以下(4)に至る迄は悉く六朝時代、(4)(5)は隋唐の間、(6)は唐代の寫經で、六朝、隋唐時代の精妙を得たと思はれる筆致を示したものである。附録中には從來の年表を繰つて見ても絶て記されて居ない建昌、延昌、延壽などの高昌の年號を以て年月を附せられた寫經數種が見えて居る、此等は梁の時代より唐代に及べるものであつて(藝文第六年第十一號内藤博士高昌國の紀年に就て)を参照せられたい)從來全く知られなかつた事

實を語つて居るものである。なほ此の附録中の(7)なる貝葉式の古寫律文斷片、同偈頌斷片なども、經典の形式の上から重要視すべき資料である。

史料の部は二十六葉、(1)の晋の泰始五年の日附ある木製招子をはじめ(2)の咸和年間前涼の西域長史であつた李柏から、焉耆王に送つた書牘の草稿二葉、(9)の唐天寶五載、大曆九年の牒狀、(11)の大曆十六年の借錢文書、(16)の(3)なる建中五年の孔目司文書、(18)の(4)なる唐の戶籍の斷片及び、(26)の高昌國人の墓表六種などは特に注意すべきものと思ふ。木製招子は歐人の獲たものも多くあつて其の中には武帝時代の天漢の年號の見ゆるもの迄あるのであるが、紙に書いた書牘の類では、李柏文書以前のものはなかつたやうである、高昌國人の墓表の中には、先きに紹介した佛典の跋文に見ゆる年號以外別に延和の年號なども見えて居る。

經籍の部は十葉、(1)唐鈔論語孔氏本鄭玄注の如き珍重なるものをはじめ、(2)唐鈔尚書孔傳、同春秋左氏傳、(3)六朝鈔本舊注孫子(4)史記仲尼弟子列傳、漢書張良傳等が主なるものであらう、たゞ之が悉く寸餘の斷片で尺に及ぶものは一二にすぎないのは惜みても餘りあることである。

西域語文書は二十三葉、其の中(1)―(5)に回鶻文佛典五葉、(6)に同摩尼教經典、(7)に同書籍斷片、(8)―(10)に同文書三葉、(1)に突厥文文書斷片、(11)に蒙古文佛典等が收められたりまた觀貨羅語のものには(12)の寺院出納記録、(13)の出納簿文書、梵語觀貨羅語對照天文に關する文書、(14)の(1)の木簡などが見は、佉盧底底文の木簡も少なく、其の中には(17)(18)に計算文書、土地購賣文書、契約文書、商

業上の取引文書等があり、(14) (16)に西夏文佛典三葉、其の他(20) (22)に梵文佛典、(28)の(3)及び(4)に西藏文書、(29)に數片の不明語文斷片が收めてある、(1)回鶻文の天地八陽神呪經は圖には終りの一部分より出て居ないが、實物は珍しくも殆んど全巻が保存せられて居る、此等の西域語は目今歐洲學者の競ふて研究して居るもので然も亦た至難の事業である、吾人はかゝる六つかしい文書、殊に祖貨雜文、佉盧底底文書等のものに對してそれ〴〵説明を付せられた學者の苦心に對して甚深の敬意を捧げるものである、

最後の印本の部は六葉で悉く佛畫佛典であるが、それが皆唐刻といふ珍奇のものである、但し此の中の(2)及び(3)の回鶻文佛典斷片二葉も唐刻と説明してあるのは恐らく活字の誤りか、然らずんば編者偶然の誤謬であらう。

以上は簡単に圖譜中の重要なものとを思料したものを紹介したのであるが、勿論此の以外にも研究家の立場によりて更に〴〵重要なものもあらうし、さうでなくとも一紙一片みなそれ〴〵價值を有し、輕視す可らざるものであることはいふ迄もない、吾人はかゝる資料の獲得に甚大の力を盡し、また之を公やけにして研究に資せられた大谷光瑞師及び探檢の任に當られた渡邊哲信、堀賢雄、橋端超、野村榮三郎の諸氏に對して深く謝意を表すると共に廣く之を世の好學の士に薦めてあらゆる方面から之が研究の試みられんことを切望する。

こゝに紹介を終るに當りて余輩はまた此の出版の事業に當つた國華社に對しても敬意を表せねばならぬ、當初此の書物の發行の計畫せられた時から到底損失は免がれない覺悟であつたと言いて

居るが、實際營利的の事業とは誰も思はぬであらう、萬一利益が得られたならばそれは豫期が外れたので意外の仕合せといふべきである、吾人は同社の爲にまた學界の爲に此の當て外れを希望するのであるが、さもなくも此る覺悟の下に同社が此の出版に當つたのは、全く學界の爲に盡したる美事といふべきで我等の謝意を表したい所である、加ふるに其の獨特の製版の妙技は印制の精巧と相俟つて全く人をして實物に接するかと思はせる、此の點に於ては歐洲の此の種類の出版に對しても、たしかに一歩を拙んで、居るものと思ふ(定價八十五圓〔羽田〕)

周公と其時代 一册 文學博士 林泰輔著

大倉書店發行

本書は林博士が支那古代研究の一端なり、自序の一節に曰く「まづ詩書を主とし之を他の古書に參して周公の事蹟を考へ又その學術及び思想を釋れ更に之を以て古來周公の制作と稱せられたる周官儀禮及び周易爻辭と比較しそれらのは果して周公の思想より出でたりや否やを討究し以て周公の眞相を窺はむことを務めたり云々」と、周公の事蹟、周公の學術及思想、周公と周官儀禮周易との關係の三編に大別し更に細説する所あり、附録として周代宗法考、周官制作時代考、儀禮制作時代考を添ふ(定價二圓二十錢)

渤海考 一册 文學士 島山喜一著

目黒書店發行

奉公叢書の第三編として、著者が大學卒業論文に修正を加へて發刊せるもの、前篇は渤海王國興亡を中心とし其の民族の消長を

叙し、後篇は渤海主國の文化を論じ、外篇第一にては我が國との交通を述べ、外篇第二にては其の都府及び四至に就きて考證を試みたり(定價一圓)

支那美術史彫塑篇 大村西崖著

本篇一冊 附圖二缺 佛教刊行會圖像部發行

著者が故岡倉覺三氏の支那の古彫塑に着目したる以來の此の方面の研究に一步を進めたるものにして、九經百子より文獻を鈔出し、帝室博物館、東西兩大學、美術學校の藏品、正倉院御物を見、更に羅振玉氏以下の諸家の秘藏をも歴覽して此の大篇を作れるなり、收むる所、佛教像、道教像、廟祠像、陵墓、儀衛、亭堂、碑闕、宮館、苑池、の莊飾山川鎮壓の諸像乃至玉石工金工、刻木塑陶瓦甃等にして、記事凡そ千二百項、金石碑銘二千六百餘種、上は大古よりはり下五代に至る、

附圖收むる所九百七十八圖、努力の迹敬服に値するものあり、支那に關係せる學術及び美學を研究する者其他好古僻ある人士の座右の好伴侶たるべし(定價二十五圓)

印度佛教史 文學士堀賢德著 文樂閣發行(定價一圓)

東部蒙古 東亞同文會編纂

蒙古及滿洲(時事叢書) 烏居龍藏著 富山房發行

李中書年譜三卷附先師小德錄一卷 蔣彤撰

中書(又は紳綺と書す)は李兆洛の字にして、兆洛は江蘇陽湖に生れ清の嘉慶道光の頃地理學の大家として世に知られし人なり。

二書共にその弟蔣彤(丹稜と號す)の撰に係り、前者は二十家年譜の例に倣ひ李氏の年譜を編せるものにして、後者はその言行を録

せり。

言舊錄一卷 張金吾白撰

此書は張金吾(字は慎庵又は月香)四十二歳の時自ら撰べる年譜にして、次に歿せる故殆どその全生涯を載す。金吾は常熟の人にして李兆洛と時を同うし、博學能文にして藏書家として盛名あり、愛日精廬藏書志、同績志、金文最等を著はせり。

查他山年譜一卷 陳奉巖輯

他山は查慎行(字は悔餘、晩年初白菴を築き居りしかは世人初白先生といへり)の號にして、慎行は清初海寧に生れ、後海内の詩宗として吳梅村と名を齊うし、康熙帝に仕へて翰林院編修となれり。本書はその外曾孫陳奉巖の輯録に成り出處事跡信にして微あり。

瞿木夫年譜一卷 瞿中溶自撰

木夫は瞿中溶(字は莠生)の號にして、中溶は嘉定に生れ錢大昕の婿となり、金石の學に闕通し、之に關する著書多く、道光末に歿せり。本書はその自撰にしてその境遇をも詳載し、よく性情を發露せり。

徐壽臧年譜一卷 徐士燕撰

壽臧は徐同柏(繪莊と號す)の字にして、同柏は嘉慶道光の頃の金石學者として名あり、本書はその子徐士燕の撰する所なり。

葉天寥年譜一卷續一卷別記一卷甲行日注八卷 自著

天寥は葉紹衷(字は仲韶)の號にして、明の末吳江の華閩に生れ早く才名を負ひて清福比なく、僑者として俠士として廣く世に著はれしが、晩年家族死喪し、悲悼の餘田に遊れて儻々なれり。前

記諸書の中年譜は四十九歳、續譜は五十七歳の時に撰み、別記は幼時よりの見聞を叙し、日注は五十八歳より六十歳までの日記を詳録せり。

嘯々吟二卷 貝青齋撰

本書は鴉片戦役の際、揚威將軍奕經の幕下にありて軍務に服せし青齋貝子木が、詩文を聯綴して陣中の實歴感懐を述べたるものなり。

以上七書は皆吳興の劉承幹が總纂孫を顧問として採擇刊行せるものにて、何れも精確なる史實を含み大に参考の値あり。

嶺海焚餘三卷 金鑿撰

本書は明の遺臣金鑿(字は道隱)が隆武、永曆二帝に仕へ、閩廣に流離せし際の奏疏四十餘篇を収めしものにして、當時の政法の得失、宮掖の實情を窺知するに足る有益なる史料なり。

墟宮遺錄二卷 著者不詳

明の崇禎一朝宮禁の事を録し、彤史拾遺記、玉堂書記、酌中志の如き明末の雜説と符合する所あり。往々捏造の盡語なきに非ずと雖、考核に資するもの大なり。

以上二書は烏程の張鈞衡が孔廣森の士禮居叢書の缺を補はんさて纂輯しつゝある適園叢書の第一第二篇なり。

增訂清史講義二册 汪榮寶著許國英訂

清史綱要一册 吳曾祺編

本國史二册 趙玉森傳運森著

同參考書上二册既刊 趙玉森蔣維藩著

中國風俗史一册 張亮采著

同 同 同 同 上 上 上 上

東三省紀畧十卷 徐驥述 同

明如隱堂本洛陽御監記五卷 董氏誦芬堂發行 上

景宋殘本五代平話十卷 同 上

西夏國書略說一卷 羅福長著 羅氏東山學舍發行 上

西國書類編一卷 羅福成著 同 上

西夏譯蓮華經考釋一卷 同人著 同 上

西洋史に關するもの

歐米最近世史十講 文學博士原勝郎著 弘道館發行

本書は一昨年、京大特別講演に於て、歐米最近の重要問題なる

題下になされたる九回の講演を修正増補し、これに大阪朝日所載の

一篇を修補し添加せるものなり。其の内容は「セルビア主義と列

強の均勢」メキシ」コの内亂」アルバニア公國」戰前の佛蘭西」戰

前の獨逸」戰前の露西亞」英領南阿爾卑の近狀」愛爾蘭自治問

題」英國に於ける婦人參政權運動」大戰爭開始前後の三週間」の

十講より成る。されば讀者はこれによつて最近歐米の大勢並びに

政治上社會上の重要問題に對する概觀を知り、更に今次歐洲戰亂

勃發の由來、形勢發展の真相を明かにし得べく、殊に第十講「大

戰爭開始前後の三週間」は目下言論社會の大問題たる戰前外交の

實相如何に對する著者の識見を窺ひ知るべきなり。(定價一圓三拾

錢)

歐洲動亂史論 法學博士吉野作造著 警醒社發行

本書は昨年正月以降の中央公論に連載せられし論文を集録せし

ものにして「塙洪國皇儲殿下の暗殺」「塙洪國と塞國」「塙寒の開戦

並に露獨佛英の參加ニ伊太利の虐亂ニ土耳其の運命」の五章より成る。政治史專攻の著者が歐洲動亂の因由推移を論じ時局の真相を説明せるものにして、此種の著述中最も注意すべきもの、一たるを失はず。(定價一圓八十錢)

西洋史話(國民學藝叢書) 文學博士箕作元八著

東亞堂發行

本書は著者の講演又は筆録になれる史話、史論、傳記、沿革、批評等に關するものを編纂せる六百餘頁の大冊なり。上古史、中古史、近古史、最近史及び雜纂の五部に分類せられたる數多き論文講話の各篇は前に出でたる兩亭史說集と合せて多方面に亘れる著者の識見を窺ふに足るべきものなり。(定價二圓五十錢)

歐洲教育の進化 文學博士谷本富著

大日本圖書株式會社發行

本書は著者が嘗て大學に於て講演せしものを基礎として編述せるものにして大學講義全集の第二輯として發行せらる。希臘羅馬時代より現代に至る歐洲教育の史的發展を論じ、附録として明治教化の起原を添加せり。此種の名著に缺乏せる我讀書界に於て本書の公けにせられしは甚慶すべきことなるべし(定價一圓八十錢)

近世獨逸社會思潮 二卷 大日本文明協會譯同會發行

原書はTheobald Ziegler氏の名著„Die geistigen und sozialen

Strömungen des neunzehnten Jahrhunderts»に於て近世獨逸の發展を精神的文化の方面より觀察し、時代思潮と實社會の狀態との密接なる關係を説けるものなり。文明協會の翻譯は原著を省略せる所鮮からざれども、この好著の邦譯を得しは一般讀書子の爲

に幸ひ甚しといひつべし。

アツシシの聖フランチェスコ 中山星樹譯 洛陽堂發行

本書は有名なる Paul Sabrier の „Vie de Saint Françoise d'Assise»を翻譯せるものなり。原書は教界の革命僧、托鉢僧團の創唱者たる中世基督教史上の偉人の生涯を知るに於て遺憾なきものなるはいふ迄もなし。(定價一圓八十錢)

歐洲大亂の眞因と交戰列國(附膠州灣處分論) 小寺謙吉著

大正書院發行

列強の外交政策 法學博士堀川新著

實業之日本社發行

オルレンヤンの乙女(西洋史新話七)

北方の流星王(同八)

文學博士 箕作元八著 博文館發行

西洋武士道譚 文學士栗原古城著 北星道發行

民族競争(時事叢書二三) 文學博士大類伸著 富山房發行

土耳其及土耳其人(同二四) 長瀬鳳輔著 同

成功の外交家カゾール金傳羽田浪之瀨著 醒社發行

地理學に關するもの

近畿地方の土地と住民 理學博士小川琢治

京都府教育會發行

大正三年十二月京都府教育會講演會に於て小川博士が述上の題目で講演せられた速記を版にして發行したもので、近畿地方の土地と住民に就きて博士の卓識を窺ふべきのみならず、自然地理學と人文地理學との連絡及地理學と史學との關連又地方誌等に就きて

の一典型を得たるものといふべきである。上篇土地では一、總説の條に近畿地方の意義、面積、延長を、二、日本群島の地理的區劃の條では兩分説、三分説、三地域の特色を、三、近畿地方の地勢の條では地貌上之を三地區に分ちて詳細なる各論をなし、四、氣候の條では南中北三區の對照、氣候と森林及水力の利用を説き更に下篇住民では一、原住民、二、大和民族と歸化民族、三、居住の狀態、四、都市に分たれてゐる、其自然地理にまれ人文地理にまれ著者の創見に接する事が出来る。(定價廿錢)

地質要報第二十五號(南支那地方の地質)

理學士 野田勢次郎

野田理學士の踏査研究になる浙江省海岸、錢塘江地方、湖北省北部等の地質報文で局部の地質圖も挿まれてゐる。

椰子の葉陸 農學士井上瀧彌著 六盟館發行

今は故人であるが、元、臺灣總督府に奉職して熱帯植物の研究に従つた著者が大正三年「官命を帯び農業に關する植物研究の目的を以て」新嘉坡、暹羅、馬來、爪哇、ホルチオ、セレベス、緬甸、印度、錫蘭、馬尼拉等の地方の紀行である。故に其記事が此地方の農業植物の事項に偏せるは勿論であるが、氏は一般的の視察も之を試みんと努力し、其結果として「所謂圖南の志は南洋印度に於て始めて顯博すべきを知るのみ」としてある。平易なる文章で書き出されて椰子の葉陸の風情が窺はれて面白い。經濟地理學上から見ても參考とする所が少くあるまい(定價二圓五十錢)

踏査南洋の寶庫 陸軍歩兵少佐神保文治著

實業之日本社

近來、レイ南洋に關する書籍の出版は頗々として現はれる。此書も亦其一である。著者が大正三年より四年に亘り滿一ヶ年間彼他に滞在の産物であつて、南洋殖民論、南洋農業論、ホルチオ島南洋の天候と衛生、農業植民實施要領等五編に分ちて其觀察と意見とを發表してあるが、其旅行の目的が彼地に經營を起さんとする爲めホルチオなるリバリ河畔の地を以て其割策の地と定めてある。されば、其記事が彼地の農業の狀態や官憲の方針や企業に對する進路などを説くに汲々として、普通には迂遠の事の如く思はる、地理や土人の性狀などの根本問題に觸れざるは憾むべき事であるが、渡航希望者に限らず、經濟狀態の一斑を窺ふには參考とせらう。(定價八十五錢)

穗積博士著「隱居論」に對する論等

我法學界の寄宿穂積陳重博士は去明治廿四年隱居論と題せる一著書ありしが、其後研究を重ねらるゝと二十有餘年、今や紙數八百頁に餘る形態たる大著述「隱居論」第二版を出版せられ、近時の我學界に幾多の光彩を添へられたり。隱居論第一版は隱居の起源、種類、名稱、年齡、効果、將來の六編に分たれしが、第二版に於ては隱居の性質及要件、隱居の無効及取消を加へて八編となれり。而かも其立論の根柢に至りては第一版と第二版との間大なる徑庭なく、また著者自ら第二版の序に「本書の第一版に述べたる所と殆んど符節を合すが如く大に意を強うするに足るものあり」と説かれ居れり。

隱居論第二版の世に出づるや之れに對して中田法學博士は國家學會雜誌六、七月號に、福田法學博士は三田學會雜誌六、七、八、九

月號に各詳細なる論評を試みられ、また夙に隱居論に對して見解を異にする三浦文學博士は早くも五月本會臨時總會の講演に於て三時間に亘りてその反駁論證を試み、次で其筆記は雜誌太陽の八九、十月號に掲載せられたり。蓋し老博士のこの著實なる研究新著に對し、斯くの如く専門諸學者が眞面目なる純學術的論評を試みられたるは大正四年の我學界に特筆すべき一出來事と云はざるべからず。

中田博士が此新著に對する論評を見るに、其の劈頭に此書が老博士平素の學風を發揮して誠に遺漏なく、我法學界の爲め慶賀措く能はずと前提し、全編を六節に分ちて老博士と見解を異にする所を論ぜられたり。其隱居の起源に關しては、穗積博士が葉老俗變じて隱居俗を生めりとの起源説に人類進化史上に於ける一般的原則たるの價値を附與せんとして列擧せられたる各種の材料は未だこの原則を成立せしむるには充分ならず、換言すれば此退老俗が一般的に葉老俗より進化せるものなとを確實に證明するものなしと評し、我國王朝時代の隱居に關しては、隱居の名稱及び事實が王朝時代に於ける致仕の制度に發源せりとの穗積博士の見解に賛し、而も王朝時代の隱居は致仕を意味せりとのとは必ずしも當時の隱居(致仕)も亦後世の隱居の如く所謂生前相續を伴ふものなりとの結論を生ずるとなしと論じ、穗積博士が致仕と後世の隱居とを混合せるを非難せる三浦博士の説に對して何等辯明するなきを遺憾とすに附言し、武家時代に於ける隱居の年齢に就ては三浦博士の説と大體一致し、穗積博士が隱居年齢低下説を支持すべく擧げられたる例證の極めて薄弱なるを論難し、尙隱居の種類、隱

居と番代、隱居再相續、家督の意味に就きても各詳かに批評せられたり。

穗積、三浦兩博士が隱居制度論争は主として本邦に於ける隱居の起源、沿革に關するものなり。穗積博士の我が國中古に於ける致仕が後代の隱居と同一なりと云ふに對して、三浦博士は中古の致仕制は官吏の辭官及び恩給に關する規定にして其官を辭し、隱遁するものある點に於て後世の隱居に類するも辭官者が戶主の地位を去るは、致仕の必然的結果にあらざれば、隱居致仕年齢即ち隱居年齢と解するは共に當らずと考證詳細を極めらる。

三浦博士は又邊に穗積博士が第一版隱居論に於て「我國ノ隱居年齢ハ武家時代ニ至リテ低下シテ五十歳トナレリ」と説かれたるを非難して、博士が執筆せる日本百科大辭典卷一の七七一頁に於て「積穗博士は其著隱居論に於て(中略)隱居年齢は中古に於て七十歳以上なりしを武家の時代は短縮せられて五十歳となりきと説かれたれど其實此事なし」と論ぜられたるに、穗積博士は又第二版に於て第一版の自説を支持すべく六個の例證を提出せられたり。これに對して三浦博士は「一々これに答へ、穗積博士が所論たる武家時代に於て戶主として兵役の義務ありし武官は智識經驗を主とする文官と異りて體軀の強健を要するより、五六十歳にて退隱するの必要生じたりとの説に就ては、積穗博士が擧げられたる例證の皆近世江戸幕府及び諸藩の法制實例に限られたるを難じ、鎌倉室町の兩時代の法制實例が隱居論の推理に反對するものあるを指摘し、後世江戸時代に隱居論に見ゆるが如き事實の發生せるは、その自ら別途の理由に基くなり」と論じ、即ち主として相續法規の

關係より五十以上の隱居の俗を助長し太平久しきに及んで武士の遊惰安逸を食ふの風は、幕末幕府が諸士の隱居を容易にせる諸法制と相待つて益々此種の隱居の増加を告げたりと説き、而もこはもこより隱居論の老年隱居にもあらざれば又江戸時代全部を捉へる社會現象にもあらずと反駁せられたり。

福田博士は先づ老博士が鏗鏘として心身共に壯者を凌ぐ大著述に敬意を表し此新著に接し快感禁じ得ざる所なりと述べ、主として社會學、經濟學の方面より觀察せられ、最初に第一版と第二版との間に於て社會政策上に於ける著者研究の進歩せるを注意し法制史として見たる本書の本邦に於ける隱居制度そのもの、法制史的敘述を希望し、尙書中引照の體裁一様ならざるを指摘せられたり。而して本書の根本思想として我國にのみ特有なりと誤り考へらる、隱居制度は、人類社會の有機的發展史上の一產物にして、決して一民族特殊の現象にあらざることを汎く社會學、人類學、人類學並に法制史上の材料によりて立證せんとして、而も此部分に於ては著者は確かに十分成效したりと評し、然して何故に隱居制度が人類社會に斯く善く發生したるやの理を進化の原則によりて説明し、而して今日に至りて此制度が漸く廢滅に歸せんとするは必竟社會進化の結果たる所以を細説し、進んで將來に於て此制度に代るべきもの、既に其端緒を啓きつゝある所以を證明して、所謂社會部思想の勃興を指摘したる著者の立論は一半は成效し、一半は致未だ其勢に應ずるに及ばざるもの、如しと論評し更らに隱居進化論の可能、不可能を評説し、又著書の隱居起源勞力説を評して獨逸農民の隱居制度は著書の論ずる如く、單純簡明

にして大體的な説明を以て其真相を究むることを得るものにあらず、又我國武士の隱居に就ても勞力説は維持し難しと、著者が常に大體に着眼する法律進化論は這箇獨逸農民隱居制を究明するに於て勞多くして功少しと認めざるべからずと論斷せられたり。
〔魚遊〕

◎雜誌及新聞

『敝史學に關するもの』

- 現代史學とランプレット 阿部秀助……………歴史地理(二六ノ二)
- 歴史的評價と道德的評價 紀平正義……………哲學雜誌(三四五)
- 古代研究と思想問題 桑木嚴翼……………大陽(二二ノ一一)

國史に關するもの

一、政治經濟

- 德政の研究 三浦周行……………國民經濟雜誌(一九ノ六、七、八)
- 隱居制度を論じて 櫻積博士に答ふ 三浦周行……………大陽(二二ノ一一、一二、一三)
- 大禮の法制 三浦周行……………京都法學會雜誌(一〇ノ一一)
- 江戸時代と浪人問題 栗田元次……………歴史地理(二六ノ一)
- 御即位禮大嘗祭の沿革 和田英松……………國學院雜誌(二二ノ九)
- 皇室制度の一般 松本愛重……………國學院雜誌(二二ノ九)
- 入宗僧成尋及び當時の日宋交通 鷲尾順敬……………歴史地理(二六ノ二)
- 金森出雲守の移對に就て 白川繼紹……………飛騨史壇(一ノ一〇)
- 鎌倉時代河野氏配下御家人考 西浦泰治……………伊豫史談(一ノ夏卷)

正統辛亥約條に就て 瀨野馬熊…………… 史學雜誌(二十六ノ九)
伊豫海賊沿革略 史景浦直孝…………… 伊豫史談(一夏ノ卷)

檀良親王の半面と太宰府 武谷水城…………… 筑紫史談(第六集)

櫻田の變と福岡藩 藤井甚太郎…………… 筑紫史談(第六集)

修學院行幸と内藤信致 稻葉君山…………… 日本及日本人(六六〇)

東京寛部のみ相 岡部精一…………… 歴史地理(二六ノ四)

保科正之の宗教政策 安藤祐專…………… 歴史地理(二六ノ四)

二、學藝宗教

法隆寺の古建築は果して推古式か 喜田貞吉…………… 歴史地理(二六ノ二)

嚴島と平家の藝術 春山武松…………… 心理研究(八ノ三)

文化問題及び教化運動としての淨瑠璃と江戸長唄…………… 心理研究(八ノ四)

朝鮮藝術衰亡の原因及其將來 小宮三保松…………… 朝鮮叢報(八月號)

大谷本願創立考 山田文昭…………… 無盡燈(二〇ノ七)

奈良朝天台の二名師 河邊操縁…………… 無盡燈(二〇ノ七)

俯凝然の著述に就て 白石芳留…………… 伊豫史談(一ノ夏卷)

盤珪和尚に就て 白石芳留…………… 禪宗(二四四)

我國僑者の佛教觀 鵜谷慶謙…………… 禪宗(二四四)

觀世音寺の研究 木下讚次郎…………… 歴史地理(二六ノ二)

行基舍利甌器に見わたる其姓氏と享年に就て 梅原末治…………… 考古學雜誌(五ノ一二)

天明宗源流考 長井衍…………… 歴史地理(二六ノ三)

神道史と五行織緯の説 清原貞雄…………… 藝文(六ノ七一)

スメラミコト考 佐藤仁之助…………… 國學院雜誌(二九ノ七)

宇和郷と宇和津彦神社に就きて 長山源雄…………… 伊豫史談(一ノ夏卷)

香取の文書を見て 宮地直一…………… 國學院雜誌(二ノ八)

姪子神考 川合清丸…………… 日本國教大道叢書(三二六)

神使考 坎亭小史…………… 風俗叢報(四七三)

徳川時府初期の異學の禁に就きて 花見朔巳…………… 歴史地理(二六ノ一)

維新前後に於ける服飾界の動搖 櫻井秀…………… 歴史地理(二六ノ一二)

儀式の成立と其要素 櫻井秀…………… 考古學雜誌(六ノ一)

尾形光琳二百回忌 春山武松…………… 日本美術(一七ノ七)

光琳考 福井利吉郎…………… 藝文(六ノ七)

守札考 清原貞雄…………… 郷土研究(三ノ五)

古神像風俗に就て 江馬務…………… 考古學雜誌(五ノ一一)

三浦梅園と帆足萬里 武藤長平…………… 東亞之光(一〇ノ七)

金蘭方 富士川游…………… 典籍(二)

武藏の研究 沼田賴輔…………… 典籍(二)

古今集の異本 大日鯛二…………… 典籍(二)

委奴國王印に關する和漢六學者の考證 中村久四郎…………… 東亞研究(五ノ七)

全羅南道智異山華嚴寺華嚴石壁經に就て 稻田春水…………… 朝鮮及滿洲(九八)

三、史 傳

山田常典先生傳 大西源一…………… 國學院雜誌(二一ノ七)

堀直寄論 魚沼無日…………… 國學院雜誌(二一ノ七)

廣瀨常與入道勤王事歴 岡村利平……………飛驒史壇(一ノ一〇)

農學の鼻祖と伊豫人 菅菊太郎……………伊豫史談(一ノ夏卷)

立碓實山の事蹟 高原謙次郎……………筑紫史談(第六集)

下野國誌の著者河野守弘翁の傳 森本樵作……………歴史地理(二六ノ二)

島津齋彬公 武藤長平……………藝文(六ノ八)

廣島に於ける石川丈山 藤岡繼平……………尚古(六一)

河野通有傳 藤岡繼平……………伊豫史談(一ノ秋卷)

恩田蕙樓先生の事跡上下 服部富三郎……………東亞研究(五ノ七八)

覺如上人弟子乘專法師の研究 鷲尾教導……………六條學報(一六七)

名所圖繪と竹原春朝齋 林田春潮……………日本美術(一七ノ八)

増見屋三右衛門日記 幸田成友……………歴史地理(二六ノ三)

蘭法醫學の祖述者詹林家 深浦三三郎……………歴史地理(二六ノ四)

四、古文書、考古、言語

支那古代に於ける法制經濟關係文字の解剖 後藤朝太郎……………國家學會雜誌(二九ノ七)

灰土山古墳中の骸骨 財前克己……………考古學雜誌(五ノ一一)

北海道に於ける先史住民の風俗習慣 鹽田弓吉……………人類學雜誌(三〇ノ六)

アイヌの婦女掠奪物語 吉田巖……………人類學雜誌(三〇ノ六)

攝津國櫻井谷村に於ける古代製陶所の遺跡及びその遺物に就て……………考古學雜誌(六ノ一)

(補遺) 笠井新也……………人類學雜誌(三〇ノ八)

常陸國田介墟篇一 高島多米治……………人類學雜誌(三〇ノ八)

熊澤藩山先生の筆蹟に就て 井上通泰……………典籍(二)

豊後國東地方の一種の横穴 河野清貫……………歴史地理(二六ノ二)

國府村ヨウ峠口の古墳に就て 角竹喜登……………飛驒史壇(一ノ一一)

金石文の範圍及び分類 三宅米吉……………考古學雜誌(五ノ一二)

碑の裝飾考 塚本靖……………考古學雜誌(五ノ一二)

古瓦に現はれたる文字 高橋健自……………考古學雜誌(五ノ一二)

鰐口の研究 沼田賴輔……………考古學雜誌(五ノ一二)

朝鮮語の子音同化 小倉進平……………藝文(六ノ八)

朝鮮語動詞に關する重要な疑問 間宮龍豐……………朝鮮叢報(十月號)

朝鮮語と滿洲語蒙古語との關係 金澤庄三郎……………同上(十月號)

新羅及百濟の古墳 關野貞……………朝鮮及滿洲(第九十七號)

朝鮮に於ける金石文 小田幹治郎……………同上(第九十七號)

帶方郡の遺跡 淺見倫太郎……………同上(第九十九號)

新羅及羅林の名稱考 平澤山人……………同上(第九十九號)

釣鐘の寸法 香取秀貞……………考古學雜誌(五ノ一二)

稻荷神像と博山爐 長井金風……………考古學雜誌(五ノ一二)

慈恩寺大雁塔の剛別圖樣 關野貞……………考古學雜誌(五ノ一二)

譬の一字を有せる古瓦片 中山平次郎……………考古學雜誌(五ノ一二)

美濃國加茂郡伊深村龍安寺鐘銘に就て 小川榮一……………考古學雜誌(五ノ一二)

山城國分寺址發見の文字瓦に就いて 梅原末治……………考古學雜誌(五ノ一二)

日本人種論に對する批評 白鳥庫吉……………東亞之光(一〇ノ八)

江戸時代の塚 松川碧泉……………風俗畫報(四七三)

五、雜 載

武士を夷さる事 喜田貞吉……………歴史地理(二六ノ四)

藤原鎌足及不比等墓所考 喜田貞吉…………… 歴史地理(二六ノ五)

讚岐壇の浦考 喜田貞吉…………… 歴史地理(二六ノ三)

享保の饑饉と宇和島藩 兵頭賢一…………… 伊豫史談(一ノ秋卷)

平澤元愷の長崎松前漫遊 新村出…………… 歴史地理(二六ノ三)

鴻臚館の所在に就て再び藤井學士の示教に答ふ 中山平次郎…………… 考古學雜誌(六ノ一)

倭奴國と倭面土國及び倭國とに就いて稻葉君の反問に答ふ 喜田貞吉…………… 考古學雜誌(六ノ二)

日本鑄工史にある飛驒の釣鐘…………… 飛驒史壇(一ノ一〇)

大隅の國府及其附近の歴史地理…………… 歴史地理(二六ノ二)

藝備地理資料…………… 尙古(六一)

シラの島及ゴールズに就きて 内田銀藏…………… 藝文(六ノ八十)

大黒山島 湯原直平…………… 朝鮮叢報(十月號)

李朝四祖の傳説と其の構成 池内宏…………… 東洋學報(五ノ三)

朝鮮書籍解題 今西龍…………… 東洋時報(第二百四、二百五)

東洋史に關するもの

張騫の事蹟及び人物評論 中村久四郎…………… 史學雜誌(二六ノ八)

同(完結) 同…………… 史學雜誌(二六ノ九)

明末乞師孤忠張非文 後藤秀穂…………… 史學雜誌(二六ノ九)

亞細亞民族の斯拉フ民族に及ぼせる影響 淺野利三郎…………… 史學雜誌(二六ノ九)

宋末の提舉市舶使西域人蒲壽庚に就いて 桑原隲藏…………… 史學雜誌(二六ノ一〇)

史學雜誌(二六ノ一〇)

再び遼金時代の乳軍に就いて 篠田互…………… 史學雜誌(二六ノ一〇)

大宛國の貴山城に就いて 桑原隲藏…………… 藝文(六ノ九)

北京の露國公使館に就いて 矢野仁…………… 藝文(六ノ九)

遼金時代の乳軍に就いて 羽田亨…………… 藝文(六ノ九)

五行大義 富岡謙藏…………… 藝文(六ノ一〇)

入宋僧成尋及び當時の日宋交通 鷲尾顯敬…………… 歴史地理(二六ノ二)

倭寇詩史(倭扇行) 後藤秀穂…………… 歴史地理(二六ノ二)

利瑪竇傳(完結) 中村久四郎…………… 歴史地理(二六ノ二)

印度教學の中心那蘭陀學院に就いて 重松俊章…………… 歴史地理(二六ノ五)

朝鮮語とウラルアルタイ語との比較研究(第五回) 白鳥庫吉…………… 東洋學報(九月號)

龜甲獸骨文字の研究(第三回完) 後藤朝太郎…………… 東洋學報(九月號)

回鶻文法華經普門品の斷片(附、回鶻文の天地八陽神呪經補遺) 羽田亨…………… 東洋學報(九月號)

漢畫像石に見ゆる怪物の意義に就いて 原田淑人…………… 考古學雜誌(五ノ一二)

慈恩寺大雁塔の剛別圖樣 關野貞…………… 考古學雜誌(五ノ一二)

宋版方輿勝覽 福井學圃…………… 典藉(二)

宋槧太平御覽 和田英松…………… 典藉(二)

洪範を論ず(下) 宇野哲人…………… 東亞研究(五ノ八)

河南出土の龜甲獸骨(下) 石濱純太郎…………… 東亞研究(五ノ八)

文選に就て 佐々木平次郎…………… 東亞研究(五ノ八)

蒙古關係史論 稻葉岩吉……………日本及日本人(六六二、六六六)
 蒙古人の淨土教思想 古屋謙道……………宗教界(一一ノ九、一〇)
 河口慧海氏西藏入國記……………大阪毎日(九月六日より)
 佛教と西藏 河口慧海……………都新聞(九月十三日より)
 王昭君 城本幸子……………東京日出(九月廿四日より)
 國學叢刊(上海)

第十三卷

島夷志略校注・藤田豊八。 陳乾初先生年譜下、吳喬。
 匿石先生文集下、羅振玉。 天下同文、元周南瑞。

第十四卷

不睦敦攷釋、王國維。 島夷志略校注二。 漢石存目 王懿
 榮、羅振玉補。

第十五卷

島夷志略校注三。 魏晉石存目 尹彭壽、羅振玉補。 襄理軍
 務紀略一。 五十日夢痕錄、羅振玉。

第十六卷

島夷志略校注四。 杜東原先生年譜、沈周。 襄理軍務紀略
 二。 願志齋文鈔、丁晏。

西洋史に關するもの

中世都市の典型としての「ローテンブルク」 阿部秀助……………
 ドプシュ氏「カロリング朝時代の經濟發展」に就いて(第四回完結)
 植村清之助……………史學雜誌(二六ノ八)

イタリア國に現存する最古の金石に就て 坪井九馬三……………
 ……墨西哥紛亂の今昔 吉野作造……………國家學會雜誌(二九ノ八)
 トーマス・マン及其時代(一、二) 高橋誠一郎……………
 …… 三田學會雜誌(九ノ八、一〇)
 第十九世紀に於ける獨逸經濟發達の一斑(二、三) 高島佐一郎……………
 …… 同(九ノ八、一〇)

地理學に關するもの

露國宮廷秘史(五、六、七)……………世界(一三ノ五、六、七)
 ギルドの起源(第一回) 植村清之助……………史學雜誌(二六ノ九)
 コンスタンチノープル處分論 大類 伸……………歴史地理(二六ノ四)
 西洋諸國の即位禮について 新見吉治……………尙古(六二)
 一、自然地理學に關するもの
 錢塘江流域の地質 野田勢次郎……………地學雜誌(八月)
 湖北省南東部の地質 野田勢次郎……………同上(九月)
 本邦高山に於ける寒帶湖の存在に就いて 田中阿歌麻呂……………同上(九月)
 …… 同上(九月)
 西藏拉薩の氣候觀測 中川源次郎……………同上(九月)
 豆爾諸島噴火の歴史 大森房吉……………同上(九月)
 浙江省南部橫斷旅行 野田勢次郎……………同上(九月)
 錫山嶺山 伊木常藏……………同上(十一月)
 道後溫泉 河野 密……………同上(十一月)
 熱海溫泉の損傷 横山又次郎……………同上(十一月)

南洋の地質 岩崎重三……………地質學雜誌(七、八月)

支那湖北省北西部の地質 野田勢次郎……………同上(九、十月)

珊瑚島の出來方に就て 山崎直方……………同上(九月)

地勢觀察の要目 神保小虎……………同上(九月)

日本列島及朝鮮半島地體要論 小藤文二郎……………同上(十、十一月)

南洋の隆起珊瑚礁と燐礦 青木康二郎……………同上(十月)

支那浙江省北西部の地質 野田勢次郎……………同上(十一月)

肥前小濱の所謂噴泉塔に就いて 園山市太郎……………同上(十一月)

東上線附近の飲用水雜用水 後瀬正三郎……………同上(十一月)

井戸と水道 横手千代之助……………東洋學藝雜誌(九月)

布施屋及地名「フセ」長沼賢海……………歴史地理(十月)

布施屋及地名「フセ」を讀て長沼先生の教を乞ふ 中山太郎……………歴史地理(十月)

ヤルトト島植物地理略 小泉源一……………植物學雜誌(十月)

日本本土に於ける古生代植物化石の存在 藤井健次郎……………同上(十月)

富士山植物目錄に追加すべき數種 早田文藏……………同上(八月)

朝鮮森林植物編五、櫻桃科 中井猛之進……………同上(八月)

二、人文地理學に關するもの

日本水力電氣事業の發達 森 忠藏……………地學雜誌(八月)

舊加賀藩の散居村落制に就いて 牧野信之助……………同上(八月)

歐洲戰場と歴史及地形との關係 西村萬壽……………同上(八月)

攻馬の事情 志賀重昂……………同上(八月)

中世都市の典型としての「ローテンブルグ」 阿部秀助……………同上(八月)

九十九里濱田野開拓考 高橋源一郎……………歴史地理(八月)

佛蘭西國リール市の成因及其發達の経路 子爵 田中阿歌藤呂……………同上(十月)

比律賓群島に就て 三山喜三郎……………同上(十、十一月)

ヤップ島の石貨と貝貨 山崎直方……………同上(十一月)

清國內地旅行談 塚本 靖……………東洋學藝雜誌(九月)

軍用ある十種の金屬 松原一……………同上(十月)

大隅の國府及其附近の歴史地理 栗田茂治……………同上(十月)

支那鐵道問題 小林源藏……………歴史地理(八月)

南洋占領諸島の森林及種物 金平亮三……………太陽(八月)

歐洲に於ける日本商品に就て 三村鐘三郎……………大日本山林學會々報(九月)

朝鮮の殖林事業 渡邊爲吉……………同上(八月)

歌米に於ける林業の近況 川瀬善太郎……………同上(八月)

青島の殖林事業 齋藤晋作……………朝鮮叢報(八月)

内地朝鮮間帆船貿易狀況調査 小林淺五郎……………同上(八、十月)

滿洲大豆輸出成績……………同上(八月)

大正三年中煙草の輸移出入の調査……………同上(八月)

朝鮮叢報、共進會紀念號なる九、十一の両月號は朝鮮の地理學的的研究上より見て參考すべきもの多し

世界上に於ける日本 二階堂保則……………統計集誌(九月)

最近四年對象全國製茶產額地方別 加藤銀藏……………同上(九月)

支那經濟事情一斑 河合利安……………同上(九月)

金銀に關する一般統計 三枝茂智……………同上(八月)
言語上より見たる朝鮮人種 白鳥庫吉……………人類學雜誌(八月)

三、雜 載

アイヌの婦女採蕃物語 吉田 巖……………人類學雜誌(六、八月)
佐賀地方の傳説と事實 太田保一郎……………郷土研究(十一月)
城端雜記 牧野信之助……………同上(九、十月)
對馬見聞談 藤井甚太郎……………歴史地理(十月)
朝鮮見物記 坪谷永哉……………太陽(十一月)

西 洋 の 部

● 圖 書

西洋史に關するもの

Robinson, Prenticed & Beard: Outlines of European History Part I, II.

本書第一卷はシカゴ大學の埃及學及び東方史教授 H. Prenticed 氏が古代東方諸國及び希臘羅馬時代を、コロンビア大學の史學教授 I. H. Robinson 氏が羅馬帝國の倒壞より十八世紀初頭迄を分擔執筆し、第二卷に於ては Robinson 氏及びコロンビア大學の政治學教授たる Beard 氏が以後の近代史を擔任し居れり。古代中世の簡約なるに比して近代を非常に詳密に叙述せること、各章各節の名題配置に特色多きこと、卷中の挿畫を成可有意義に使用し且つ便宜なる説明を附せること、各章末に有益なる質問題目を擧げ

卷末に各章に關する參考書目を掲げたること、確に本書に就いて注目すべき諸點たるべし。而も吾人は特に卷頭の序言に、

「The older historical mammals were, in the main, short accounts of past events; but it is really past Conditions and past institutions that are best worth knowing about?」

と喝破し、本書の目的が過去の單純なる出來事ではなく、Conditions, Ideas の解明に subordinate せんとするにありとの主張を、本書に表現せられたる最も推奨すべき態度精神ならんを信するなり。蓋し本書の加きは高等教科用として甚だ恰好の著述と稱すべし。

Arthur E.P. Brome Weigell: The Life and Times of Cleopatra, Queen of Egypt. (Edinburgh & London, 1914)

本書は多年埃及に在住して彼地の遺物遺跡に關する智識に富める著者が精確なる史料を基礎とし、風土に對する親しき體驗と時代に對する深き同情とを以て、古代史上に喧傳せらるゝクレオパトラの生涯を叙述したるものなり。氏は全卷を二部に分ち第一部にはクレオパトラミシザーミの關係第二部にはクレオパトラとアントニーとの關係を述べたるが、就中冒頭の該女主人公が性格を論ぜる一章は羅馬史家の偏見を責め當代社會の風潮を説きて、時代と境遇とに深き同情ある觀察を試みしは吾人の興味を感ずる所なりとす。此書クレオパトラ傳の上乗なるものとして史家に對りて有益なる著述なるのみならず、行文平易暢達、考証的文字辭きを以て一般讀書子にも好個の讀物たるべし。

Hland, Probyn, & Fawcay : English Economic
History Select Documents. (London, 1913)

經濟史に關する便宜なる史料集に乏しきは吾人の常に憾とする所なり。本書は學界に於けるこの缺陷を補はんが爲に公にされしものにして紀元一〇〇〇年より一八四六年に亘る英國經濟史關係の文書撰集なり。其の收むる所、各時代に於ける法令、公私文書の主要なるものなるが、間々個人の著述中よりも價值ある箇所を採擷し居れば嚴格なる意義に於ける文書集にあらず。而して著者の序文にも云へる如く、本書は決して深奥なる特殊研究に資するを目的となせるものにあらずして、只經濟史の概觀を窺はんをするもの、爲に、確實なる基礎的史料を供するに過ぎざれば、其の集録せる文書の數や新奇なる點に於て誇るべきものにあらずるなり。然しながら、中世期のラチン又はノルマン・フレンチの文書を盡く英譯せる如き、各史料を絶對的年代順に配列せずして、一時期毎に事項別に分類したる如き、各事項に就いて簡單なる解説を附し主なる參考書を掲げたる如き、孰れも一般學習者によりて多大の便宜を興ふるものなるべし。

P. M. Sykes : A History of Persia. 2 Vols.

(London, 1915)

本書は波斯通たる Sykes 中佐の著にして、古代より現代に亘り該地域に於ける興亡治亂の跡を叙説せるものなり。記事平明加ふるに卷中多數の寫眞、地圖を挿入したれば、右益にして且つ興味ある波斯史の好著をこふべし。

David J. Hill : A History of Diplomacy in the

第一卷 (一八) 紹介 西洋の部

International Development of Europe. Vol. III
(London, 1914).

本書は有名なるヒル氏の歐洲外交史第三卷にして Absolutism 時代を叙説し居れり。即ちルイ十四世時代の佛國對外政策及びフレデリック大王時代の列國外交を中心をなせるものなり。

J. H. Rose : The Origins of the War. (Cambridge
University Press, 1915)

本書は近世に於ける英獨の史的關係に詳しきローズ氏が歐洲戰亂起因に對する獨逸の責任、態度を論じたるものにして、兵獨特の論辨は時節柄興味深きものなり。

M. P. Price : The Diplomatic History of the War.
(London & New York, 1914)

本書は先づ最近二十年間に於ける歐洲列強の外交を略叙し、それより、戰亂勃發前三週間の形勢推移を、英の White paper 獨の Denkschrift 露の Orange book 白の Grey book 奥の White Paper 等の材料によりて説明せるものなり。

Ninian Hill : Poland and the Polish Question.
(London, 1915)

本書は著者が一九一三年夏ポーランドを訪ひ、實地見聞せし所を基礎として著はせるものなり。ポーランド王國の興亡より説き來り、現在善壤露治下のポーランド人の實狀を述べたり。

地理に關するもの

J. P. Iddings : The Problem of Volcanism. (Yale

第一號 一六三

University 1914 Y.1000)

著者は北米合衆國シカゴ大學で岩石學を教授し、又地質調査所の技師で、火山岩の研究者として知られ、先年南洋より菲律賓等を經て日本の一部も旅行した事がある。本書は即ち氏の専門の火山の問題を論究したものである。

F. H. Hatch : *Mineralogy*. London 1912 Y.200

著者の *Text-Book of Petrography* が好評であるが、如く、此書は礦物學教科書として好評を得ん、亦中等教師の良參考書の一か。

Salisbury, Barrows and Tower : *Modern Geography*. (New York 1913. Y.250)

亞米利加地理學叢書として地質學やカレッツチ地質學教科書や、地質學概要などが公刊せられてゐるが、本書は即其叢書の一で、先に *Elements of Geography* をものしたシカゴ大學地理學科の諸氏がハイスクールの教科書とする目的で公刊した共著である。初めに自然地理學を、後に人文地理學を述べた通論で、其目的に従ひ簡單ではあるが、四百頁の割合には内容が多く挿繪挿圖も鮮明で要領を得てゐる。綿密な研究上の參考書たるには餘りに簡であるけれども、一般的の智識を得るには便利なもので、中等學校の教授に與る人にまつては蓋長參考書の一である。此位の大さの本で英文では外にノースウェリーのものや、タールなどの著者がで、良參考書があるが、其等には自然地理學を主眼として人文地理學の方面は隨處に記載してあつても特に此の部門を設けてゐない。此の書といへども人文地理學の方面は自然地理學の方面に較ぶれば頁數は少いけれども、地人關係の極く概論は之を試みてゐる。人文地

理學には自然地理學の根底が全く不必要であるかのやうに思ふ人は、そんな議論をする前に此書でも一瞥する必要がある。

Alec A. Golding : *An Introduction to General Geography*. (Cambridge 1915 Y.200)

此書も亦地文人文兩方面を兼ねた通論で、中等教師の參考書として恰好のものである。

Lake, Philip : *Physical Geography* (1915, Y.375)

著者は英國ケンブリッヂ大學地理學の講師で先にラスタルと共に地質學教科書を公にし、今單獨此の書を成した。近來英文の地文學書は大抵合衆國に生れてゐるが此書は英國産の少い數の中の一つである。英文で書かれた地文學書は少くないが、低級のものも多くて高級のものが殆ど缺けてゐる。其の缺陷を補はんこともされたものが此書である。此の故に普通の地文學書に載する極普通の事は之を省き、又記述の順序も變へて、海洋、氣界、陸界の順を逐うてゐる、其英國學風を脱しない所に、此書の缺點もあり、亦長所もあると思ふ。

G. J. Mills : *Chile* (London 1914 Y.300)

South American Handbooks として南米各國の地誌が刊行されるが、此書は其一で、智利の最新の地誌として一讀すべきものかと思ふ。

Grippith Taylor : *A Geography of Australia* (Oxford 1915 Y.675)

最近物故した英國地理學界の泰斗ハーバートソンの監修の下に、刊行せらるゝ、オックスフナード地理學叢書の一として發行せられ

たのが即ち濠洲の地理書である、著者はシドニー大學の經濟地理學の講師で、濠太利亞聯邦氣象觀測所の地文學方面の擔當者である。濠洲地理の著者としては其人を得たものといはなければならぬ、四六版八十頁の小冊子であるけれど、行文平易にして、内容嶄新、圖表の面白きものもある、蓋し中等教師の參考書として推し得べきものな信すべし。

G. E. Mitton : Austria-Hungary. (London on 1914 ¥5.00)
Alan Lechrbridge: The New Russia. (London 1915 ¥8.80)

歐洲大戰亂勃發以來、交戰國の國情に關する書籍は英文のものでも相當に出版せられてゐる。此に擧げたる兩書の知きも其例である、時機に投ぜんとする所謂キヲモノたる嫌ありて、精密なる科學的研究物と見る事は出来ないが、一般國情を察するには便利で、輕い調子で運ばれた行文は、讀む人をして倦怠の念を起さしむる事は少いであらう。

Golden Home : Beautiful Britain 各 ¥0.70

1. English Lakes. 2. The Romance of London

3. Windsor and Eton. 4. The Thames.

鮮麗なる多くの三色版と輕快なる文とで書名の示すが如く英國の自然の美を通俗的に紹介せんと試みたものである。元來が科學的研究のものではないが、中等學校などで生徒と共に此試みの幾分を味はうとするには一寸長い本であらう。一、英國の湖水といふも實は山川湖泊を述べたもの。二、は倫敦の昔話を倫敦塔、ウエストミンスターアペー、セントポール寺院、倫敦の古刹、市會議事堂、其他倫敦の名高い建築物につきて。三、はイートン、

城、及宮殿などからイートンカレッジの事迄を説明し。四、はテムズ河畔の名所舊跡に就きて説明してある。

Chisholm : A Smaller Commercial Geography. (London.

1914 ¥2.25)

英國エヂンバラ大學の講師たる著者は地理學教科書や地圖を著し、又經濟地理學としては、先に Handbook of Commercial Geography のいふ本を出してゐる。然し此書は稍々大き過ぎ、教科書向でないので、此書から撮要したのが即ち此題名の教科書である。其出版は一九〇五年であるが、其後改訂の必要が起つたのでそれを施して新刊したのが此書である、内容の章の區別等はハンズブックと變りはなく、生産、運輸に影響する事情を述べて主産地に移り、更に世界各國につきて概説し、世界の交通路を説き、最後に附録を添へてある。三百頁未滿の小冊子で、而も其記述の方法より見れば、經濟地理學の眞髓に觸るゝには少しく距離がある感があつて、物産誌といひ度いものであるが、此方面の輕便な參考書たる資格は失はぬ。世界各國に就きて述べた所は本書の長所でもあり、亦短所でもあるが、中等學校の教科書を取扱ふ人にとっては、此記述法が却て便利であるであらう。

Wells : The Teaching of Geography. (Cambridge.

1915 ¥1.75)

Cambridge Handbooks for Teachers のいふ叢書の第一冊として出版せられたもので、著者が數年の經驗を學理によりて實際教授上の指針たらんとするの希望によりて書かれたもので教授法の空論をした物でなく、教材の選擇と其取扱法を理論と實際とを

ら平易に述べてゐる、稍々もすれば地理學科にても形式論のみを試みて教授法の本旨を盡したかの如く心得る人ありと聞くが、如何にして材料を蒐集し如何なる方針によりて之を取捨し之を如何なる程度に如何なる目的で教授すべきか等の注意を怠つて講話の形式のみに捕はれ其の技巧によりて其教材の拙劣なるを糊塗せんとするが如きは最も戒むべき事ではあるまいか、本書を精査すれば長所もある代りに缺點もあり又必ずしも首肯し得ざる所もあらうが講話教材の事から室内郊外の實習等まで著者の意見が發表せられてゐる。抽象論に走せざる所に此書の面目があるやうに觀する。

H. I. Mackinder: The Teaching of Geography and

History. London, 1914, ¥0.50

著者(H. Mackinder)は小學校の地理科歴史科に對する教授上の意見を述べた小冊子で先づ方法及主義の題下で地理的觀察の事から教科書を用ふる迄の地理科教授上の注意を示し、次に其著「我國」「國體」「歐洲大陸」「遠隔諸國」「世界の民族」「現代英國々家」至七冊を以ての順次によりて教授するに當り採るべき方針を述べてゐる。氏の意見では先づ土地を知らしめ然る後其地に起りたる歴史上の事實を教授する方針で土地觀察の準備として述上の方法及主義を論じてゐる、而して年級進むにつれ述上の土地に對する概念に基き先づ英國々土を知らしめて後其歴史を授け漸時英國より遠隔の地に及びかく「世界民族」によりて世界の總括をなし最後に英國現代の國家で結ぶ事になつてゐる、本書が英國を本位としたるは當然

の事で従つて其まゝ之を我國のものに採用する事は妥當でないが其方針に就きては參考すべき所が少くないと思ふ、特に英國と我國とは地理上の類似點の多いことから又土地を知らしめて後其歴史を授けらるゝいふ點からだけでも一讀すべきものであらう。

● 雜誌及び新聞

東洋史に關するもの

Young Pao (滬報)

Mars 1915, Vol. XVI, No. I.

Paul Pelliot,

Quelques transcriptions de noms tibétains.

Henri Cordier,

Les correspondants de Bertin.

W. W. Rockhill,

Notes on the relations and trade of China with the Eastern archipelago and the coasts of the Indian Ocean during the fourteenth century. Part II.

Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft.

69 Band. — 1/2. Heft

Ksemendra's Darpadalanam (, Dunkelstrennung'),

Von R. Schmidt.

Die Reihenfolge der Buchstaben in Alphabet.

Von Wanda V. Bartels.

Die anordnung des arabischen Alphabets.

Von P. Schwarz.

- Die jüngste ambrosianische Sammlung arabischer Handschriften.
 Von Eugenio Griffini.
 Assyrische Besschwörungen.
 Von Erich Ebeling.
 Weitere Bemerkungen zu den Upanisads.
 Von A. Hillebrandt.
 Die Repetition in der Seräsprache von Sengambien.
 Von F. Hestermann.
 Indologische Analecta.
 Von Johannes Hertel.
 Kritische Bemerkungen zur Kājātaraṅgī.
 Von E. Hultzsch.
 Die „Eselstadt“ Damaskus.
 Von Paul Haupt.
 Duryōdhana (skr.) = Du Rāidhan (arab.) Von E. Griffini.
 Journal of the Royal Asiatic Society.
 January, 1915.
- I. Examples of Tibetan Seals. By E. H. Walsh.
 II. The Indo-aryan Nasals in Guṇṇāti.
 By R. L. Turner.
 III. Notes on Dr. Lionel Giles' Article on "Tun Huang Lu".
 By Suh Hu.
 IV. The Tun Huang Lu Retranslated.
 By Lionel Giles.
 V. The Archives of an Oracle.
 By L. C. Hopkins.
 VI. The Zoroastrian Period of Indian History.
 By D. B. Spooner.
 VII. A Kharosthi Inscription.
 By F. W. Thomas.
 VIII. Notes on the Edicts of Asoka.
- By F. W. Thomas.
 Miscellaneous Communications.
 The Bushell platter or the Ts'in Hou Pan.
 By John C. Ferguson.
 The Poetry of Munabbī. By R. P. Dewhurst.
 Persian and Arabic Words in the Salsai of Bihār Lal.
 By R. P. Dewhurst.
 Two Notes on Vedic Religion.
 By A. Berriedale Keith.
 The Sannaiṇa and the Mahavara.
 By A. Berriedale Keith.
 Malava-gana-sthiti.
 By J. F. Fleet.
 Initial and closing Dates of the Reign of the Hoysala King Vishnuvardhana.
 By M. T. Narasimhengar.
 Mr. Marshall's Taxila Inscription. By F. W. Thomas
 La Pondarion de Goeje.
-
- April, 1915.
 IX. The Date of Kanishka.
 articles.
 By Sir J. H. Marshall.
 X. The Deity of the Crescent Venus in Ancient Western Asia.
 Ay Joseph Offord.
 XI. Yasna XXXII, 1-8, in its Indian Equivalent.
 By Prof Lawrence Mills.
 XII. The Ancient Indian Water-clock.
 By J. F. Flint.
 XIII. The Treasure of Akbar.

By Vincent A. Smith.

XIV. The Credit due to the Book entitled 'The Voyages and Travels of Z. Albert de Mandelslo into the East-Indies?'

By Vincent A. Smith.

XV. Sumerian and Georgian: A Study in Comparative Philology. Part II.

By M. Tsereteli.

XVI. The Archives of an Oracle: Notes on the Text.

By L. C. Hopkins.

Miscellaneous Communications.

Le Nom des Turks dans l'Avesta.

By E. Blochet.

Monghal boghdo, 'Sant?'

By E. Blochet.

Notes on the Avesta.

By R. P. Dewhurst.

The Taxila Scroll of the Year 136.

By Z. F. Fleet.

The Date of the Ramayana.

By A. Berrisdale Keith.

A Correction in the Indian calendar.

By R. Sewell.

Inscriptions in the Victoria and Albert Museum.

By L. D. Barnett.

An Aramaic Inscription from Taxila.

By L. D. Barnett.

The First Aramaic Inscription from India.

By A. Cowley.

By R. Sewell.

XVIII. The Meaning of the 'Om-mani-Padme-hum?' Formula.

By the Rev. A. H. Francke.

XIX. The Zoroastrian Period of Indian History. Part II.

By D. B. Spooner.

XX. Sumerian Women for Field-work.

By Theophilus G. Pinches.

XXI. Examples of Tibetan Seals: Supplementary Note.

By E. H. Walsin.

XXII. A New Ganga Record and the Date of Saka

380.

By Z. F. Fleet.

Miscellaneous Communications.

A Peculiarity of the Khotanese Script.

By A. F. Rudolf Hoernle.

Sanscrit Inscription of the Royal Asiatic Society.

By L. D. Barnett.

The Puranic Histories of the Early Aryas.

By Z. Kennedy.

Irregularities in the Puranic Account of the Dynasties

of the Kali Age.

By P. E. Pargier.

Agniskandha and the Fourth Rock-Edict of Asoka.

By S. Krishnaswami Aiyangar.

The Hoyasla King Bhatti-Deva gishnavardhana.

B. L. Rice.

Sir Z. H. Marshall's Kharosthi Inscription from Taxila.

By F. W. Thomas.

July, 1915.

articles.

XVIII. The Kings of Vijayanagara, A.D. 1486-1509.

Historische Zeitschrift

Historische Zeitschrift.

3. Folge—19. Band 1. Heft 1915

- Richard Hennig : Zur Verkehrs- und Kulturgeschichte Ost- und Nordeuropas im 8. bis 12. Jahrhundert.
Karl Hampe : Die Pfälzer Lande in der Saufzeit.
Walter Sohn : Die Soziallehren Melanchthons. Pro- beweisung, gehalten am 29. Juli 1914.
W. Platoff : Das erste Auftreten Russlands und der russischen Gefahr in der europäischen Politik.

Deutsche Geschichtsblätter.

16. Band. 1915. 1. Heft.
Georg Mueller : Visitationsakten als Geschichtsquellen. 2. Heft.

Adolf v. Wiedemann-Warnhelm : Die Polizei unter Josef. II. 3./4. Heft.

Hermann Waschke : Eindrücke vom Kurfirstentag zu Regensburg 1630. I.

Rudolf Wolf : Bibliographie zur Geschichte der Deutschordens-Balleien. 5. Heft.

Hermann Waschke : Eindrücke vom Kurfirstentag zu Regensburg 1630. II. 6. Heft.

Ludwig Wolfram : Zur Erinnerung an Karl Theodor von Heigel.

Hermann Waschke : Eindrücke vom Kurfirstentag zu Regensburg 1630. III.

Revue Historique.

40e Année. Tome CXXIX. Juillet-Août 1915.

Louis Brehier : Constantin et la fondation de Constantinople.

Emile Amelnean : La Conquête de l'Égypte par les Arabes (1er article).

E.-W. Dahlgren : Une Contestation francoespagnole au sujet d'une affaire d'inquisition. L'affaire du Capitaine Lopez, 1712—1720.

G. Nestler Tricoche : Le Siège de Norwou ou la bataille des Maladroits; épisode de l'histoire des Mormons.

Ch. Morlet : A quelle époque le detroit des Daridnelles a-t-il recu ce nom ?

The English Historical Review.

Vol. XXX. No. 120, October 1915.

A.H. Lybyer : The Ottoman Turks and the Routes of Oriental Trade.

J.G. Edwards : Sir Graffydd Ilwyd.

E. Armstrong : The Italian wars of Henry II.

Clarence C. Crawford : The Suspension of the Habeas Corpus Act and the Revolution of 1689.

C.K. Webster : Castlereagh and the ...